

特別支援学校中学部での授業「見つけた考えた」に関する考察

－「対話的な学び」における、一人ひとりへの対応の充実にに向けた取り組み－

○山崎大輔

(旭出学園(特別支援学校))

菊池けい子

(旭出学園教育研究所)

KEY WORDS: 知的障がい、授業分析、指導方法

1. 問題と目的

本校の中学部では、「見つけた考えた」という授業を20年間行ってきた。この授業は、生徒が進行役の教員(以下MT)の支援を受けながら、近所や学校で見つけた身近な自然やものについてみんなの前で発表した後、MTはそれについて理解を共有したり深めたりすることができるように働きかける対話的な学びである。発表者以外の生徒は、持ち寄られた発表物(できるだけ実物)について五感を通して気づいたことや知っていること、感じたことや考えたことなどを、他の教員(以下ST)の支援を受けて発言する。授業は、やりとりの中で言葉と発表物の特徴を結びつけたり、思考を深めたり、質疑応答したりしながら進んでいく。授業中の生徒の反応や発言は記録によって文字化され、家庭でも共有できるように「見つけた考えた通信」として紙面で発行している。これまでに、生徒が日常生活の中で理科的な視点を持てるように、また推理力を高められるように、教員間で授業の進め方や個別な対応について話し合い、工夫を重ねてきた。それを踏まえて本研究では、学内の研究所員が加わり、授業検討を行い、授業のねらいや進め方を見直すとともに、授業「見つけた考えた」における生徒一人ひとりへの対応の充実にに向けた取り組みを考察する。

2. 方法

(1) 授業検討期間: X年4月～X+1年3月。授業30回。

(2) 授業の概要: 週1回。約1時間半。参加生徒は中学部の生徒19名(中1:5名、中2:8名、中3:6名)授業場所は作業室。毎回7名程度の生徒が発表。教員(7名)と研究所員(心理士1名、言語聴覚士1名)が参加し、MT、ST、記録のいずれかを担当。

(3) 授業検討の手続き

1) 生徒について授業中の記録をとる

教員・所員は、2～4人の生徒を担当し、毎回授業後、観察・評価の観点で記された記録用紙を用いて生徒の参加の様子を記録した。

2) カンファレンスを実施する

授業を動画で記録し、定期的に教員と所員で授業の振り返りを行った。生徒の様子を報告、指導のねらいを確認し、授業の進め方や教材・教具の工夫などを検討し、記録した。

3. 結果と考察

生徒の記録と授業後のカンファレンスから教材・教具の工夫や授業の進め方について確認されたこと、並びに考察されたことを以下に述べる。

(1) 教材・教具の工夫

教材・教具は、以下の観点で工夫が重ねられてきた。

1) 発表への注目を促す→ブラックボックスの利用

2) 発言を促す・5W1Hの質問に答える→マカトンシンボルを用いた教材(シート、カード)、イラスト、写真

3) 授業の見通しを持たせる→発表順を示す生徒の顔写真が付いた名前カード、個別のワークシート

4) 気づきを深める→図鑑、インターネット上の動画の活用

(2) 授業の進め方

1) 生徒の発達レベルを想定し関わる

生徒の記録から教員の働きかけと生徒の反応を生徒の知的発達の水準別にまとめた結果、知的障がい軽度の生徒には①発表者の発言や発表物に注目する、②気付いたこと、知っていることを言葉で発表する、③わからないことは質問する、図鑑で調べて新しい知識を得る、ができるように関わっていた。中度の生徒には①発表者・発表物に注目する、②五感を使って発表物と向き合う、③気付いたこと、知っていることを言葉にする、ができるように関わっていた。重度の生徒には①五感を使って発表物と向き合う、②名称や色、形、感触、におい、味などを言葉やマカトンサイン、マカトンシンボルで実体験と一致して表現すること、ができるように関わっていた。MTは生徒の発達レベルを想定しながら、授業を進行するが、生徒の発言や反応を全て拾うことは困難であり、STによる発達レベルに即した関わり大切さが確認された。また、自閉症スペクトラム障害(ASD)のある生徒は、興味のないものに注目することが難しく、五感を使って発表物と向き合う時間をとる重要性が示された。

2) 授業を展開する視点を持つ

①類似性に気づける→色や形状が似ている。～科など植物の種類に着目。②感情や性質を表す言葉を獲得する→柔らかい・大きいなど形容詞や、甘い・辛いなど味覚の言葉。③細かい部分に注目できる→花の雄蕊を探す。虫の口の形を見る。④過去の経験と結びつける→前に～で見た。前の実の中には種があったから、この実にも種があるのでは?⑤名前から由来や使い方を連想する→夏みかんの夏って何?ブラシの木の形は?⑥大体の量がわかる→～cmくらい。⑦選択できる→実物と写真・絵カード・マカトンシンボルの一致。好きな方を選ぶ。⑧不思議!と思える→仕組みはよくわからないけど不思議!と言葉やサインで伝える。

3) 場の設定と発表物の回覧方法を工夫する

X年9月に座席を二列の半円へと見直したところ、離席が減少したことから、場の設定の重要性が確認された。また、発表物の回覧は、用意された量によって工夫する必要があり、一つの場合、MTが机の上に置き、順番に5～6人ずつ前に出て見るようにしたところ、授業への集中が維持できた。さらに発表者に発表物を配る、回収する、解体するなどの役割を与えることの大切さが見直された。

4) 生徒間のやりとりを活性化するために工夫する

①質問カードを使って発表者に質問する。②発言に対する賛否を問う。③ブラックボックスを使って発表する。

4. まとめ

生徒の記録とカンファレンスの記録を基に授業検討を行った結果、教材・教具の工夫が凝らされ、授業展開の視点が整理され、支援方法について具体的な気づきが得られた。

「見つけた考えた」という対話的な学びの中で、「5W1Hの理解」「発表する・質問するためのコミュニケーション力」

「感覚・感情に関わる言葉や形容詞の理解」「経験を思い出す」「比較する」「理科的な視点で予測/汎化/法則化」「因果関係に気付く」などの育ちを促すことができると考えた。

(YAMAZAKI Daisuke, KIKUCHI Keiko)